

# 乳幼児集団保育の問題点

— To work or not to work —

黒田実郎

## フロイトの仮説の検討

成人の精神障害の治療をライフ・ワークとした精神分析学の創始者ジグムント・フロイトは、患者の生活歴を追想法によってさかのぼり、乳幼児期に経験する精神的外傷 (psychic trauma) が、神経症の原因になる、という仮説をたてた。

乳幼児が経験するもつとも強烈的な精神的外傷とは一体どのようなものであろう……それはおそらく彼らにとつて

最愛の人である母親との突然の離別の経験であるにちがいない。

母親との間に愛着性 (attachment) が形成され、そして人見知りがすでに始まっている生後六か月以降の子どもが、母親から突然離されて、乳児院などの施設や、完全看護の病院に入れられると、いろいろな心身障害を示すが、このような症状は精神分析学者 R・スピッツによってアナクリティックうつ病 (anaclitic depression) と名づけられている。

その後、英国の児童精神医学者 J・ボウルビィは、突

然の離別経験の直後に起こる子どもの反応過程を、反抗 (protest)、絶望 (despair)、離脱 (detachment) という術語を用いて、母親との離別が子どもに与える重大な影響を次のように説明している。

最初のうち子どもは激しく抵抗し、必死になって母親を取り戻そうと努力する。その後、母親を取り戻すことに対して絶望したかのように振舞うが、しかしまだ母親に心を奪われており、その復帰を期待している。さらに後になると、母親に興味を失ったかのような反応が現われ、母親から情緒的に離脱するように見える。しかしながら、もしも分離期間がそれほど長くない場合には、子どもは決定的に離脱したようには思われない。母親と再会してしばらくたつと、母親に対する愛着が再びよみがえる。そして、その後しばらくの期間にわたって子どもは母親のそばから離れようとせず、もしも再び母親を喪失する危険性を感じると激しい不安症状を示す。

分離期間が長ければ長いほど子どもの情緒的離脱はよりいっそう深刻になり、母親と再会しても、深い愛着関係を取り戻すことが困難になる。そして子どもと他の人物との人間関係も浅薄になり、生涯、他者との間に深い信頼関係

を持続することができなくなる。このようなパーソナリティの持ち主でも、一応外見上は適応的行動を示すこともあるが、いったん衝撃的な出来事に遭遇したり、ストレスが続いたりすると、情緒的動揺が激しく、回復が困難な神経症的症状や反社会的行動が現われる。

このように、幼い子どもが突然母親から分離され、未知の環境で、長期間にわたって愛着対象を喪失すると、パーソナリティにいちじるしい損傷を受けることはこれまでの研究で、ある程度確かめられている。したがって、乳幼児期における母子分離の経験は、まさにフロイトのいう外傷的出来事にはかならない。

### 保育所のメリットとデメリット

ところで、長期間にわたって愛着対象人物を喪失する乳児院などの子どもたちと比較した場合、毎日、長時時にわたって母親から分離される保育所児もパーソナリティの形成においてなんらかの悪影響を受けるのであろうか。

三歳以上の子どもに比べると、三歳以下の子どもが初めて保育所に連れてこられた場合に示す分離不安は、乳児院

の子どもに匹敵するほど激しいことが多い。特に、母親による言語的説明を理解し得ない一歳台の子どもにとつて、登園初日に経験する母親との離別は、おそらく永遠の別れと感ぜられることであろう。

従来、乳児院や子ども病院などで観察された子どもたちの反応と同様に、保育所に入所した子どもも多くも、当初、激しく泣き叫んで抵抗し、やがて絶望して沈黙する。

そして数時間後に迎えにくる母親を見ると、しっかりとしがみついたり、泣き叫んだり、安堵の情を浮かべたり、また時には無表情のままであつたりする。このように反応はさまざまであるが、これらの個人差は、子どもの気質、年齢、性などのほかに、おそらくそれまでの母子関係が決定的要因として働いているようである。

入所当初に示す子どもとの分離不安反応はやがて消失し、それにかわつて徐々に集団生活への適応的行動が現われる。したがつて、当初にみられる保育所児の激しい情緒的ショックを、フロイトのいう外傷的出来事に相当する経験とみなすのは行き過ぎであろう。しかし、もしも保育所において暖かい保護が与えられなければ、低年齢児の入所経験はやはり一種の外傷的出来事になるかもしれない。事

実、母性的な暖かい養育がほどこされていない乳児保育所の子どもの中には、ロッキングなどの常同行動や、その他の不適応行動を示す者が多い。

ところが三歳以下の乳幼児の集団保育に対するこのような危惧とは対象的に、他方において、零歳からの集団生活は子どもの社会性や自立性を伸ばすだけでなく、DQなどの能力も向上させるので、むしろ望ましいことだと強調する見解もある。

従来 of 心理学的研究では、一歳未満の子ども同志の人間関係は必ずしも社会性を伸ばすのに役立たないという説が支配的であつた。たとえば、米国の心理学者シャローツ・ビュラーは、子ども同志の横の人間関係がいつ頃から社会的な意味をもつようになるかを調べるために、二人の子どもを対面してすわらせ、その中央に空箱、棒、たいこ、ボールを置いて遊ばせる実験を行なつた。

満六か月から八か月頃の子どもは、遊具を取りあうことはあつても、パートナーとしての人間関係はまだ困難で、たとえ一方の子どもが働きかけても他方の子どもはそれを無視することが多かつた。満九か月から十三か月の子どもは、相手の存在をある程度意識するが、それでもこの年齢

では子どもの関心は先ず最初に遊具に向けられ、それから物の奪い合いが起こり、その結果として相手を意識するというのが普通であった。

満十四か月から十八か月頃になると、子どもの関心は次第に遊具から相手の子どもに向けられるようになり、そして満十九か月から二十五か月頃になると、遊具を用いて一緒に遊ぶという傾向が次第に顕著になる。つまりこの段階になって、初めて他の子どもが遊び仲間としての役割をある程度果たす、というのがビューラーの実験結果の概要である。

筆者はまだこの実験を追試していないが、このような観点から保育所児を観察すると、やはり一歳未満の子ども同志の関係は、必ずしも社会性を伸ばすとはいえないようである。これについては目下一つの実験を計画中であるが、この種の実験以外に、零歳から集団生活を体験している保育所の三歳児と、三歳以降において初めて集団生活を体験する保育所の三歳児について、社会性や自立性を比較するような研究も現在行なっている。これらの研究結果についてはいずれ機会を見て報告したいと考えている。

ところで、零歳からの集団生活が子どもの自立性や社会

性を伸ばすのに本当に役立つのであれば、乳児院で育てられた子どもの発達が最も順調であってもよいはずである。ところが実際にはそれと逆の結果がしばしば報告されているので、零歳から保育所で集団生活を始める子どもの場合も、メリットよりはむしろデイメリットの方が多いのではないかと懸念されるのである。

### 働く母親と子どもの問題

近年、乳幼児をもつ母親の就労の増加により、保育所（特に乳児保育所）増設の要望が年ごとに増大している。このような社会的ニーズに答えることも必要ではあるが、三歳未満の子どもの集団的保護が子どもの精神発達にとつてどのような影響があるかという点について、心理学の立場から研究することも必要である。

十年ほど前に英国で、乳児をもつ母親は“*To work or not to work*”（働くべきか働かなくていいか）ということが社会的に注目され、数名の心理学者がそれについて研究したことがあった。その研究結果は“*Working Mothers and Their Children*”という題名で単行本として出版されてい

る。筆者のこの論文の "To work or not to work" という副題から、多くの読者はおそらくシェイクスピアの "to be or not to be" というあの有名な句を連想するであろうが、筆者は実はそれを前掲書の最後の章の見出しから引用したのである。

この本の結論の一部を要約すると次の通りである。

(1) 三歳以下の子どもをもつ母親が専任職 (full-time work) につくことは望ましくない。なぜなら、子どもの精神の健康にとって必要な母子の深いきずなを形成することができなくなるうえに、母親にかわるよき養育者を得ることが困難であるから。

(2) 三歳以下の子どもをもつ家庭に経済的援助を与えて、なるべく母親が家庭にとどまり、自分で自分の子どもを育てることが望ましい。

(3) しかし、乳児保育所などの保育施設を閉鎖したり、縮小したりすると、より劣悪な条件の未公認保育所などが増加するので、そのようなことは避けねばならない。

(4) 母親が安心して短時間子どもを預けることができる託児所 (nursery) や保育所 (day care) を増設すべきで

ある。

(5) 三歳から五歳頃の子どもは毎日長時間母親から分離されても特に悪い影響を受けるとは思われない。

(以下省略)

このように英国における研究では、三歳という年齢を境にして、集団保育の適否が論じられている。わが国ではこの種類の研究が非常に少ないので、乳幼児保育の問題が、福祉行政面や、社会的ニードや、あるいは感情論によって左右されやすい傾向がある。

子どもの精神発達という観点から考える場合、果たして乳幼児の集団保育にはどのようなメリットとディメリットがあるのだろうか。また三歳という年齢を、日本の場合にも一つの基準とみなしてよいのであろうか。これらのことを判断する一助として、聖和女子大学乳幼児保育センターの子どもと母親を対象にして、筆者とその共同研究者は数年来、一連の心理学的研究を行なっている。次に紹介する横浜恵三子の研究は、それらの一環として行なわれたものである。

(聖和女子大学)